

■今月の特選句

2013 年 2 月号

問はれればある色欲の初湯かな

飯塚ひろし

「問はれねば色欲失念してゐたる」ですか。「念頭に色欲を置く初湯かな」。そんなこんなで「長湯して色欲失せてしまひけり」でしょうか。

ため息の可視化現象冬の朝

山下正純

可視化現象は、科学の用語。ため息は、非科学用語。「科学非科学融合したる俳句かな」ですね。

「洒落た句にため息の出る冬の朝」じゃんじゃん。

「あゝ貴女」名前出で来ぬ木瓜の花

田中早苗

「あゝ貴女」と言われた相手も度忘れで、互いに名前の出ぬまま会話して、あらもう時間だわ。また連絡しますから、きっと遊びに来てね。

寒紅のちくちくちくと刺す言葉

西をさむ

誰彼を言葉で料理する唇にさす寒紅の血の色で生贄となる人の名は西をさむ。俳句に詠みしはその憂さを晴らすためとも思はるる。

節分の鬼を匿(かくま)ふ鬼瓦

永島董玉

節分の鬼はとっても小さいか。それとも瓦が特大か。おそらく鬼はミニサイズ。大きな瓦の母性愛。甘えん坊の鬼の名前は永島董玉。

どんど焼神と崇めし紙燃やす

ひがし愛

裏切りは誰もが気付いていたけれど、うしろめたさに行事にしちやった。不要なものは邪魔になる。すまないけれど、神様もただのゴミに。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

両手両肩で喋る外人息白し

三橋百笑

・・・意思の疎通はジェスチャで十分

モザイクのかかる話や落葉焚

柳 紅生

・・・オモロイトコで煙に巻くとは

素つぴんに溜息をつく初鏡

田村米生

・・・化けるためには時間がかかる

鼻水のすぐにでたがる風邪の床

原田 曄

・・・鼻水君は出たがり屋さん

折角のイケメンマスクして来たる

久松久子

・・・口臭ひどいイケメンかもよ

短日や老いを重ねて気短に

青山桂一

・・・気長の妻に感謝をすべき

蔦枯れて借りたる庇明け渡す

麻生やよひ

・・・家賃代わりの紅葉を残し

手袋の右手左手二親に

井口夏子

・・・可愛い盛りの子はかすがいに

降圧剤の常用始め春立つ日

伊地知寛

・・・明日は忘れてリバウンド初めか

去年今年流しに去年の食器ある

稲沢進一

・・・不精初めの一句を得たり

冬の蠅手を擦ることを忘れをり

笠 政人

・・・命乞ひなどする気のなくて

白息に紫煙の混じり競馬場

金澤 健

・・・馬は白息のみを吐くなり

あの頃に返る旧姓賀状来る

白井道義

・・・自由の身分アピールせむと

■今月の滑稽句

- | | |
|------------------------------|-------|
| 古妻の目くじら立てる煤払い | 青木輝子 |
| 【佳作】 着ぶくれし鰥夫(やもお)の背(そびら)孤独かな | 青木輝子 |
| 平社員ガード下の年忘れ | 青木輝子 |
| 【佳作】 雪なれば一日微醺を楽しまむ | 青山桂一 |
| 冬告げの風が空搔く大地履く | 青山桂一 |
| 【佳作】 あれもこれも駄目身を縮める厚着かな | 秋月裕子 |
| 支へ合ふ「人」と言ふ文字寒暮かな | 秋月裕子 |
| 初春や枰酒そそぐかすかな音 | 秋月裕子 |
| 【佳作】 冬眠は眼中になし本の虫 | 麻生やよひ |
| 今朝も夫清女の嫌ふ大嚏 | 麻生やよひ |
| 【佳作】 春二番いつも二番手だった席 | 足立淑子 |
| 過去消して消して空気の冴え返る | 足立淑子 |
| 夜の梅だれにも秘め事の有りて | 足立淑子 |
| 時雨雲休暇のたびにやってくる | 有富洋二 |
| 【佳作】 壇上に狩り出されをり年男 | 有富洋二 |
| そこかしこ浮気者なり風邪の神 | 有富洋二 |
| 病院の予約日に○初暦 | 有吉堅二 |
| 初夢を語りぬ少し色つけて | 有吉堅二 |
| 【佳作】 「出番です」薄く紅引く雪女郎 | 有吉堅二 |
| 【佳作】 去年今年貫くゲームの孫支配 | 栗倉健二 |
| ハンバーガー両端の春をかじりあい | 栗倉健二 |
| 笑って止められぬ春の頃となり | 栗倉健二 |
| 老人ホームみんなメリーな年迎へ | 安藤淑子 |
| 【佳作】 松の内も外も無きまま老人ホーム | 安藤淑子 |
| 樅の木も松に据げ代る七日間 | 安藤淑子 |
| 要らぬ歳またも授かり大旦 | 飯塚ひろし |
| 【佳作】 灼熱の恋に融けたる雪女郎 | 飯塚ひろし |
| 【佳作】 真っ白な息吐ききってへこむ腹 | 井口夏子 |
| 法螺吹いてふろふき大根ことごと | 井口夏子 |

- | | |
|----------------------|-------|
| 湯加減は降る雪まかせ露天の湯 | 池田亮二 |
| 【佳作】 散りてなお色香をますや濡れ落葉 | 池田亮二 |
| 日向ぼこ隣の本も伏せ寝する | 石川節子 |
| 【佳作】 轆や痛いいのいの字にパッキリと | 石川節子 |
| 雀より遅く目覚めてお元日 | 板倉肱泉 |
| 【佳作】 初電車終着駅の道後かな | 板倉肱泉 |
| 福引の三等ポテトチップかな | 板倉肱泉 |
| 探梅行うめぼし三人ひき連れて | 伊地知寛 |
| 【佳作】 かのひとのかぜを運べや春の風 | 伊地知寛 |
| 滅亡の日も無事過ぎてクリスマス | 伊藤浩睦 |
| 【佳作】 トラウマは卯辰巳越えて晦日蕎麦 | 伊藤浩睦 |
| 紙よりも安いと言って冬着売る | 伊藤浩睦 |
| 湯豆腐や歩き疲れて南禅寺 | 稲沢進一 |
| 【佳作】 青き踏むついでに犬の糞も踏む | 稲沢進一 |
| ウイルスや着色したき冬の街 | 井野ひろみ |
| 【佳作】 実南天突く鳥大用土産 | 井野ひろみ |
| 初夢を見る事もし暴睡す | 井野ひろみ |
| 七草のひとつのたりぬ粥すする | 今城夏枝 |
| 【佳作】 霜囀外しお日さまにあたりたる | 今城夏枝 |
| 初暦愉しきことを待ちてゐる | 今城夏枝 |
| ぎんなんを食べて胃腸もいい調子 | 入江澄泉 |
| 【佳作】 冬備え手足の老いるマッサージ | 入江澄泉 |
| 微笑みのマスクのしたの二枚舌 | 入江澄泉 |
| 鬼やらひ女鬼とあらば侮れぬ | 宇井偉郎 |
| 【佳作】 鬼やらふ国防軍と名を替へて | 宇井偉郎 |
| 頬被りした社長には馴れ易し | 宇井偉郎 |
| 除夜の音にうろたへ吠ゆる犬もあり | 宇佐美徹郎 |
| 【佳作】 雪兎式台に待つ老舗かな | 宇佐美徹郎 |
| 下駄履きが正月の音鳴らし来る | 宇佐美徹郎 |
| 力石五拾貳貫や露の臺 | 氏家頼一 |

- | | | |
|------|---|-------------------------|
| 【佳作】 | とげ抜き地蔵を洗ふ四温かな
春一番一番札所千社札 | 氏家頼一
氏家頼一 |
| | 余生とは忘年会の予定なし
思ひきり膨れて河豚の釣上がる | 越前春生
越前春生 |
| 【佳作】 | 生き甲斐のなくても生きて賀状書く | 越前春生 |
| | 獅子頭脱ぎし舞い手の笑顔かな
登校の子の喚声や落葉櫓 | 大関のどか
大関のどか |
| 【佳作】 | 戻り花二つ三つ咲く投票所 | 大関のどか |
| | スカイツリー望む路地裏福寿草
福詣布袋の腹をそっと撫で | 奥脇弘久
奥脇弘久 |
| 【佳作】 | 青汁もひと匙入れて七日粥 | 奥脇弘久 |
| 【佳作】 | スマホーンなぞる手袋無精者
鯛焼に口づけしたる火傷かな | 笠 政人
笠 政人 |
| 【佳作】 | 冬鳥賊のピクと動きぬ膳の上
降る雪や三坂馬子唄口をつく
成人日オンブライフに聴き入りぬ | 加藤澄子
加藤澄子
加藤澄子 |
| | 暖房の室外機草揺れどほし
釣り上げてまた放つ雑魚頬被 | 加藤 賢
加藤 賢 |
| 【佳作】 | 浮寝鴨君は投網が趣味なのか | 加藤 賢 |
| | 吹き荒れる冬の嵐の三日間 | 門屋 定 |
| 【佳作】 | 冬の田に雀の群れよ賑やかに
年の暮れ寺の家族は大掃除 | 門屋 定
門屋 定 |
| 【佳作】 | 割切れぬ胸の割算忘年会
寒林の解脱の境地極まれり | 金澤 健
金澤 健 |
| 【佳作】 | 百才を夢見十年日記買ふ
年用意薬貰ひに病院へ
不況でも千両万両殖え続く | 川島智子
川島智子
川島智子 |
| 【佳作】 | 初日待つ他人の背中を盾として
奉納者名碑横目に初詣
訓辞用笑顔を作る初鏡 | 菅野あたる
菅野あたる
菅野あたる |
| | 齢忘れ大騒ぎする忘年会 | 久我正明 |

	葉牡丹やあなたはこれで騙される	久我正明
【佳作】	白ショール男は腰に成人の日	久我正明
【佳作】	二枚舌焼きつ打ちつつ葛湯かな 山眠る見るべきほどのことなくて 裸木や黒きロダンの裸像立つ	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子
	白足袋も黒足袋も来し初詣	黒田忠一
【佳作】	辰の尾を巳呑み込みて去年今年	黒田忠一
	紅白のようよう終わり除夜の鐘 初夢は獺に食われてしまいけり	小泉花子 小泉花子
【佳作】	肩の荷を神に預けに初詣	小泉花子
【佳作】	日向ぼこ話は髭の剃り残し 一物をもつと読みたる夜長かな いろり端真田に塙に又兵衛と	小杉 隆 小杉 隆 小杉 隆
【佳作】	マフラーにからめとられてかくなりぬ 歯が浮きて食へぬごちそう金屏風 宝島行つて来し子の蒲団干す	小林英昭 小林英昭 小林英昭
【佳作】	とりあえず糊でくっつけ選挙選 与野党の入れ替え戦の選挙かな 名子役成長とまれと思う親	齋藤八兵衛 齋藤八兵衛 齋藤八兵衛
【佳作】	女性避け満員電車寒の朝 膝小僧寒しファッションなればこそ 一年中餅に正月なかりけり	酒井鹿洋 酒井鹿洋 酒井鹿洋
【佳作】	喪中葉書来はじめて買ふ年賀状 冷凍庫去年のお歳暮幅きかす 老齡者講習受けて師走を乗り切らん	佐野萬里子 佐野萬里子 佐野萬里子
【佳作】	留守番か警備隊かや立葵 どん詰りめたばダルマで初笑ひ 冬蠅ののろさに血の気下りけり	柴田止揚 柴田止揚 柴田止揚
	年玉にやうやく零る子の皓齒 勉強はさておき独楽や凧でこい	清水吞舟 清水吞舟
【佳作】	幾たびか敲かれし師とおでん酒	清水吞舟

【佳作】	強そうな犬に御慶を申しけり 初詣神も畏れぬ願かける 大噓太古の叫びとぞ思ふ	下嶋四万歩 下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	歌にゲーム手品は爺や文化の日 着脹れて蓑虫となる吊革 初売の買ふ買はぬを目で売子決め	壽命秀次 壽命秀次 壽命秀次
【佳作】	禁煙と禁酒封印三が日 湯たんぽの代はりに猫が丸くなる	白井道義 白井道義
【佳作】	新聞取りに行く歩幅も暮れ 電柱そんなに伸びて寒かろう プライドなんか捨てなさい圧力鍋	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	お年玉使いみちには実用書 食卓で楽しみひとつおせちたべ テレビつけ年越しそばを家族たべ	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
【佳作】	捨案山子御前も今日で停年か お年玉貰えば良い子やめにけり 寒雀一度に取るとは写真かな	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	片隅にそつと掃除機雑煮餅 我家流宝引零歳百歳も 大根引二股ばかりもてている	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	新成人キャバクラ嬢と見間違え 顔見世やセリフを邪魔し大向う 残り福拾ったつもり笹を買う	高橋マキコ 高橋マキコ 高橋マキコ
【佳作】	落葉して寄る年波の大樹かな 菰巻いて南洋気分の裸木は 年の暮首回らぬは老化とも	高橋素子 高橋素子 高橋素子
【佳作】	忘年会席で孤独の上司かな 纏われて悪い気はせぬゆず湯かな マフラーにミニスカートが顔埋め	田所己久以 田所己久以 田所己久以
【佳作】	点呼とり舟にのり込む七福神 重箱のすみに光るごまめの目 日向ぼこかくも長く猫の伸び	田中章子 田中章子 田中章子

- | | | |
|------|---|-------------------------|
| | 読初の歳時記我の聖書かな
冬さうび裸婦像の彩りなるや | 田中 勇
田中 勇
田中 勇 |
| 【佳作】 | 裏わざの知恵を授かる冬の虹 | |
| 【佳作】 | 尻餅で地球に笑窪大根引き
手作りの蒟蒻食むる手作り味噌 | 田中早苗
田中早苗 |
| 【佳作】 | 初夢のモザイクかかる場面かな
ちやんちやんこ同士でもめるチャンネル権 | 田村米生
田村米生 |
| 【佳作】 | 書き初めの勢いあふれ紙不足
取り合わせなど考えず着膨るる
足萎えて近間ですます初詣 | 津田このみ
津田このみ
津田このみ |
| | 年用意位置みな少し変へてみる
吹く風を受けとめきれず年迎へ | 薦恵
薦恵
薦恵 |
| 【佳作】 | 価値観を少し丸めて山眠る | |
| | 八五郎連れて湯島の梅探る
杖曳けば梅がはにかむ奥の院 | 飛田正勝
飛田正勝
飛田正勝 |
| 【佳作】 | 二日早離れ住む子と別れけり | |
| | 冴返る水晶玉の占ひ師
梅林紅一点を囲みゐて | 永島董玉
永島董玉 |
| 【佳作】 | 梅林紅一点を囲みゐて | |
| 【佳作】 | 勘三郎の居なくて嘆く寒九郎
酒の量増やし臓腑に寒ごやし | 西をさむ
西をさむ |
| 【佳作】 | 甚平着て忍者になつた気分の子
節分や通園バスで鬼帰還 | 原田 曄
原田 曄 |
| | 年用意賽銭箱に猫が寝て
笹鳴や晴の舞台へ特訓中 | ひがし愛
ひがし愛 |
| 【佳作】 | 笹鳴や晴の舞台へ特訓中 | |
| | 元日や遠い昭和が懐かしい
塩加減皆妻任せ薺粥 | 彦阪義久
彦阪義久
彦阪義久 |
| 【佳作】 | 初鴉去年の声で鳴いてをり | |
| | コイン切れ仕掛け獅子舞そっぽ向く
呼び鈴に従いて行きたる毛糸玉 | 久松久子
久松久子 |
| 【佳作】 | 呼び鈴に従いて行きたる毛糸玉 | |

【佳作】	がま口の鈴もちりりん初詣	日根野聖子
	酔の効いた人間になり柚子の風呂	日根野聖子
	これは明朝これはゴシック年賀状	日根野聖子
【佳作】	冬至の日 盆地の空の短距離走	藤岡蒼樹
	胴震ひ灰に未練の竈猫	藤岡蒼樹
	餅三つこなれる間汁の冷ゆ	藤岡蒼樹
【佳作】	面白い句がひよいひよいと師走句座	藤森荘吉
	家ぢゅうの猫がこたつの中に居る	藤森荘吉
	煤払村一番の怠け者	藤森荘吉
【佳作】	師走の空の迷子のごとちぎれ雲	藤原セツ子
	切絵のやうな枝を映して冬の水	藤原セツ子
	山頂に小雪を舞はせ日の出待つ	藤原セツ子
【佳作】	昨夜古酒明けて元朝屠蘇新酒	前 九疑
	川柳と句の境目や屠蘇すすむ	前 九疑
	屠蘇器褒め酒を褒めつつ手を伸ばす	前 九疑
【佳作】	初詣五十に続き六七十	松井寿子
	藪柑子千両万両朱をきそふ	松井寿子
	彼の人はいかが在はすや賀状来ず	松井寿子
【佳作】	冬桜タネも仕かけもなかりけり	松尾軍治
	寒風や尻ふきなでる厠窓	松尾軍治
	大人は数の子子供は風の子よ	松尾軍治
【佳作】	ただのヒト大勢生れ師走果つ	丸山紘一
	凶の字に慌てまた引く初御籤	丸山紘一
	虚飾なき実存主張枯木立	丸山紘一
【佳作】	冬枯れや話に花咲く同期会	三塚不二
	亡き母の蘇りかと初鏡	三塚不二
	嫁が君腹すかし鳴く野良の猫	三塚不二
【佳作】	寒鯉になりたい主婦の三が日	三橋百笑
	幾万の蓄温めて伊豆の山	三橋百笑
【佳作】	初夢に文金島田のごりょうさん	宮森 輝
	初夢に厨に立ちぬ割烹着	宮森 輝
	正月の里帰りつい過ぎ勝酒の量	宮森 輝

	エプロンを外す間もなく晦日蕎麦 切れ切れの祖母の手打ちの晦日蕎麦	村上美和 村上美和 村上美和
【佳作】	外灯の届く範囲の雪しまき	
【佳作】	仕舞湯やあとは野となれ年用意 日向ぼこ顔の真中に穴二つ 頭数かぞへ直して雑煮餅	百千草 百千草 百千草
	雑煮餅二つ重なり椀の底 再婚と真ん中飾る年賀状	森岡香代子 森岡香代子 森岡香代子
【佳作】	七草や何が何やらバック詰め	
	十八の春に帰したき傘壽かな 吹雪けども富士が見たくて銭湯へ 初日の出輝く恵み禿げ頭	森 要 森 要 森 要
【佳作】	手元見ず蜜柑を剥いて伊予生れ 手袋をもどかしく脱ぐ握手かな お終ひの奥の手未だ懷手	八木 健 八木 健 八木 健
	木枯はくはへ楊枝の出番かな 未練かな暦の末の侘しめり 既視感の夢を夢見し初夢や	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
	モザイクのかかる話や落葉焚 粉まぶし装ひをりぬ鏡餅 お年玉モナリザ含み笑ひして	柳 紅生 柳 紅生 柳 紅生
【佳作】	霜柱踏みでサクサク食ぶセンベイ 雪の朝甘えし子猫膝の上 冬の旅終えし子猫の走り寄る	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	二匹目之泥鰌冬潜衆院選 昇龍の息や景気と裏腹に	山下正純 山下正純
【佳作】	足跡置く新雪の墓地の道 心掃除のすつかり終り大晦日 霞網に守られ干さるるふぐの鰯	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	オムレツの命は黄色寒卵 初読みはムーミン一家のおでかけ	山本 賜 山本 賜

瘠せたねとマスクの人に言はれけり

山本 賜

子連れてシングルマザー成人祭
ばついちの宣言をして年賀状

横山喜三郎

横山喜三郎

【佳作】 咳ひとつして断りの電話かな

横山喜三郎

【佳作】 養生の己いたはる初湯かな
おめでたき顔揃ひけり初写真
枯落葉一休小僧の橋馳けて

渡辺さだを

渡辺さだを

渡辺さだを